# ガネフォ経験を紡ぐ

中京大学
冨田　幸祐

2019 年も暮れに差し掛かろうとしていたある日。私のもとに一通の手紙が届きました。手紙を読んだその瞬間から、私が「歴史」として視ていたある出来事は、現在進行形の「経験」へと変容しました。

ガネフォに私が関心を持ったのは大学院生の時でした。1964 年東京オリンピックを間近に控えたタイミングでこのような出来事があったのか！ 東西冷戦、第三世界、インドネシアの外交政策、日本の東南アジアへの経済進出、東京オリンピック等々、さまざまな状況が折り重なる形で進展していくガネフォの在り様は、アジアにおけるスポーツと政治の問題が、日本に対してどのような課題を突き付けたのかを研究関心としていた私にとってまさにうってつけの出来事でした。私はスポーツ「史」のテーマとしてガネフォに注目するようになったのです。

私にとってガネフォとは「歴史」でした。過去に起こった出来事であり、私には経験することのできないもの。だからこそ史料を探し、断片的で（人によっては）些細とも思われるような情報も一つ一つ確認して、そこから歴史的事実としてのガネフォを見出していくことに注力しました。そうすることでしか私がガネフォに触れることができる方法がないと思っていたからです。ところが突如としてガネフォが「経験」できるものとして眼前に現れました。ガネフォ会のみなさ

んとの交流は、まさしく私にガネフォを「経験」させていただく機会となりました。

初めてお会いできたのは 2020 年 6 月のことでした。当初は 3 月を予定していましたが、あのコロナ禍のはじまりのタイミングであり、また 4 月には緊急事態宣言の発表がありと延期に次ぐ延期を経ることとなりました。緊急事態宣言明けてまもない銀座は、銀座とは思えないほど閑散としていたことをいまも思い出しますが、この日のことで一番私の脳内に残っているのは史料からは到達しえないガネフォの光景を次から次へと語るみなさんの姿です。みなさんの一言一言が私にとって「歴史」であったガネフォを「経験」できるものにしていったのです。

「歴史」から「経験」へ、そしてその「経験」を「歴史」として描く。この「経験」を糧として私のガネフォ研究は広がっていくことになりました。その途上でガネフォ会のみなさんの「経験」を 1 つの論考にまとめさせていただきましたが、果たしてどれほどみなさんの「経験」を汲み取り紡ぐことができているのか、いまも自問自答が続いています。

いまは上記の論考を含めてガネフォを 1 冊の本にまとめることが近いうちに達成したい目標となっています。そういう思いを抱かせてくれたのも、ガネフォ会のみなさんとの出会いによるものです。

みなさんの「経験」が広く多くの人が知るところとなってほしい。微力ながら私の立場から可能な形でみなさんのガネフォ経験を紡いでいくことが出来たらと考えております。

ガネフォ出場から 60 年、誠におめでとうございます。